

学位論文 要約

「子ども－大人」関係における音楽的相互作用に関する研究
－乳児保育における「わらべうた」実践から－

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 教育学分野

D184002 本岡美保子

要約

序章 問題の所在と研究の目的

子どもの社会性の発達に関する研究の中で、乳児期初期の子どもの自己感のありようや、対人関係に関する議論が展開されてきた。そうした議論を経て近年では、子どもは生後すぐから自己が新生される過程の体験としての「新生自己感 (sense of an emergent self)」を持ち (Stern, 1985 ; Stern, 2000), 母親との相互作用によって互いの間に絆を作る (Treverthen, 1979) と考えられるようになった。相互作用とは、二者以上の人間が情動を共有し合いながらやりとりをすることである。相互作用はアタッチメントとも関連し (Bernieri, Reznick, & Rosenthal, 1988), 子どもの自己意識や社会的な認知の発達を促すことから (Reddy, 2015 ; Legerstee, 2005), 人の対人関係の基盤になっていると考えられる。

Malloch (1999) は、乳児期初期の子どもと母親との相互作用の中に音楽性があることを示し、「Communicative Musicality」¹と名づけた。この研究は以下の3点から、子どもの相互作用に関する研究に対して影響を与えたと考えられる。1点目は、乳児期初期の相互作用が既にうたい合い、すなわち音楽的相互作用であることである。2点目は、音楽性として可視化することによって、間主観性を視覚的に示したことである。3点目は、拍感の重要性を示したことである。母子が拍感を共有することで、互いに見通しを持ってやりとりすることが可能となり、安定した関係を築くことができると考えられている (蒲谷, 2020)。

乳児期初期の子どもと母親との相互作用に関する研究において、「Communicative Musicality」は情動、言語の発達にとって重要であることが示唆されている。母親の歌唱には子どもの情動を落ち着かせる効果があり (Shenfied, Trehub & Nakata, 2003 ; Nakata & Trehub, 2004 ; 梶川・黒石, 2011 ; Wulff ,Hepp & Schaal, 2021), とりわけ日本の母親による子どもとの音楽的相互作用は豊かで、その豊かさは文化的背景や言語の特徴に裏付けられている可能性があることが明らかにされている (Powers & Treverthen, 2009)。また、母親による対乳児発話 (Infant-Directed Speech)²が言語習得に効果があること (Goldstein, Schwade & Bornstein, 2009 ; 正高, 1993) も示されてきた。

三項関係が成立する乳児期後期以降の子どもと母親との音楽的相互作用に関する研究の中でも、「Communicative Musicality」が情動調整 (坂上, 1999 ; 中島・田島・佐々木, 2010 ; 中島, 2011 ; Trehub, Ghazban, & Corbeil ,2015 ; Mehr & Krasnow, 2017) や、言

¹ 「Communicative Musicality」は「文化学習への人間としての希求の現れであり、他者と共感的に動作をし、記憶し、振る舞うという人間の生得的なスキルの表れ」とされ、Pulse, Quality, Narrativeの三つの観点で整理されている (Malloch & Trevarthen, 2009)。

² 大人に対するより高く変化するピッチで、限られた語彙、短い発話、母音の変化などといった様々な特性を持つものである (Golinkoff, Can, Soderstorm & Hirsh-pasek, 2015)。「Communicative Musicality」の要素を含んだものであると言えるだろう。

語発達（岡林，2006；諸富，2018）のみならず，音楽的発達（Eckerdal&Merker，2009；今川2020；市川，2020）や社会的発達（Williams, Barrett, Welch, Abad & Broughton, 2015）を促すことが示唆されている。

上記の研究は，子どもと母親との相互作用を検討したものであるが，親以外の大人との相互作用においても，歌いかけが言語発達に効果的なこと（今福・大橋・明和，2016）や，身体の動きの同期によって相手への向社会行動が増加すること（Cireli, Wan & Treinor, 2014）が明らかにされてきた。拍感の共有は音楽療法においても効果的であるとの研究もあり（Robarts, 2009），「Communicative Musicality」が乳児期初期や母親との相互作用に限らず，対人関係を構築する上での鍵になっている可能性がある。

以上のように「Communicative Musicality」が大人との相互作用において，子どもの情動，言語，音楽，社会性などの発達を促す重要なものであることがわかっているが，研究のほとんどは行動科学の枠組みの中で，身体の動きなど外から観察可能なものをもとに，なんらかの指標に基づいた客観的な数値によって検討がなされてきた。そのため当事者の内面は捨象され，その経験の当事者の実感に基づく関係のありようや，音楽的相互作用の意義は明らかにされていないままである。ここに，客観的な指標や観察をもとにした研究の限界があると考ええる。音楽的相互作用を関係性の側面から捉えるにあたり，実証的な心理学的検討にはない新たな枠組みが必要（蒲谷，2020）なのである。

実証主義的な心理学的検討を退け，相互作用の当事者の主観性を研究の俎上に乗せた研究に，鯨岡（1999）の研究がある。研究者が母子間の相互作用に「成り込」³むことによって，相互作用の当事者の主観を捨象することなく，子どもの発達を養育者との関係から捉えたものである。しかし，こうした鯨岡の関係発達論に関わる研究群においては，一方向的な他者理解なのではないか（安部・吉田，2021a）という批判がある。また，子どもの主観を間主観的に把握することが重視されてきたために，研究者自身が子どもとの相互作用の当事者であるかどうかという点は問題にされてこなかった。よって，この枠組みをそのまま援用することはできない。安部・吉田（2021a）の批判を乗り越えつつ，研究者自身が相互作用の当事者であることに力点を置いて，当事者の主観性を捨象することなく関係性を描くことが，新たな研究の枠組みとなるのではないだろうか。そこで本研究は，子どもとの相互作用の当事者である筆者の経験をもとに，音楽的相互作用における関係性の側面を，質的な分析によって解き明かしたいと考える。その際，乳児保育⁴者であった筆者の経験をもとに，乳児保育に焦点を当てる。その理由は，以下の二つである。

³ 「いつもすでに」相手にむけられていた当事主体の関心が，今この瞬間に相手の身体へと引き寄せられ，「そこ」に凝縮されたときに，「ここ」において「そこ」を生きるという不思議な魔術的返信が当事主体に生じることを一言で言い表したもの（鯨岡，1997）。

⁴ 保育現場では長年にわたって，3歳未満児保育を3歳以上の幼児の保育とは区別して，乳児保育としてきた（野澤・淀川・高橋・遠藤・秋田，2016）。本研究もこれに倣い，3歳未満児保育を乳児保育とする。

一つ目の理由は、令和4年4月1日時点での3歳未満児の保育所利用率は43.4%、1,2歳児に限れば56.0%（厚生労働省、2022）であるなど、我が国の半数近くの幼い子どもが保育所で1日を過ごしているにもかかわらず、実践場面の研究が少なく（名和・田村・鈴木、2015）、乳児保育者としての当事者性に基づく研究もわずかなことである。言葉のままならない乳児の言動やその意味を言語化することは容易ではなく、方法論も確立されているとは言いがたい。二つ目の理由は、乳児保育に焦点を当てることで、これまで母子間の研究がほとんどであった音楽的相互作用に関する研究を、進展させることができると考えられることである。乳児保育という営みの中で捉えることで、母子間に閉じた視点ではなく、より広い視点で音楽的相互作用における「子ども－大人」関係のありように迫ることができる。

その上で本研究は、音楽的相互作用であるわらべうたをうたい合うことに焦点を当てる。わらべうたとは、子ども同士や子どもと養育者との遊びの中で言葉に抑揚がつき、一つのまとまりをもって歌のように聞かれるものである（嶋田、2016）。わらべうたはこれまで、子守唄やあやうたに代表されるように、乳児の情動を安定させ、子どもを育てるうたとして伝承されてきた（阿部、1998）。保育者養成のテキストでも紹介され、実際の乳児保育においても日々行われている現状があるにもかかわらず、研究はわずかで、保育者の実感をもとにした実践の意義に関する検討も不十分である。本研究を行うことで、乳児保育におけるわらべうた実践に対しても寄与することができるのではないかと考えた。表1は、「Communicative Musicality」の観点から、様々な音楽的相互作用の特徴を示したものである。音楽的相互作用には「Communicative Musicality」のPulse, Quality, Narrativeの全てが含まれているが、それぞれの音楽的相互作用の特徴がわかるように観点を提示し、その差異を示した。Pulseの観点としては、拍に伴う身体の動きを用いた。拍に合わせた身体の動きが前提となっているものを◎、必ずしも拍に合うとは限らないが身体の動きがあるものは○、それほど身体が動かないものを△にした。Qualityは、言葉の抑揚との関連性を示した。創作された歌の歌唱の場合は、言葉の抑揚よりも旋律の美しさや情動性を重視していると考えて△とし、そもそも声を用いないものは×にした。Narrativeは、相互作用の自由度、つまり、相互作用の当事者の意図や、行動に込められた意味が相互作用にどのくらい反映される可能性があるかを示した。

表1 「Communicative Musicality」の観点で見た音楽的相互作用の特徴

観点	Pulse	Quality	Narrative
音楽的相互作用の例	拍に伴う身体の動き	旋律における言葉の抑揚の影響	相互作用の自由度
わらべうた	◎	◎（子守唄などは△）	◎
創作された手遊び歌	◎	○	△
創作された歌	△	△	△
Infant-Directed Speech	△	◎	◎
手拍子	○	×	△
タッピング	◎	×	×
楽器遊び	○	×	○

この表から、音楽的相互作用の中でもわらべうたは、拍に伴った身体の動きがあり、言葉の影響が強く、相互作用の自由度が高いという特徴があることがわかる。また、拍に伴う身体の動きは、どのような音楽的相互作用であっても関連がある。こうした特徴を踏まえて検討することで、音楽的相互作用に通底するものと、一方で、そこからはこぼれ落ちるわらべうたに特有なものを示すことができるのではないかと考える。

以上より本研究は、乳児保育における子どもと保育者であった筆者がわらべうたをうたい合った経験を検討し、「子ども—大人」関係における音楽的相互作用の意義について提示することを目的とする。その際、音楽的相互作用によってどのような関係性が構築されるのか、さらには音楽的相互作用に通底する意味とは何かを明らかにすることを通して、この目的を達成する。併せて本研究は、音楽的相互作用が、子どもの対人関係に対してどう寄与するのかといった点に示唆を与えることができる点で意義があるのではないかと考える。

なお本研究では音楽的相互作用を、やまだ (2010) の「うたう」と鷺田 (2015) の「聴く」の定義を援用しつつ相互作用であることを加味して、「二者以上の人間が情動を共有し合いながら、雰囲気やその場の空気と呼んでいるような心理的场所〔ここ〕で共存する関係において、一方は情動や、拍及び旋律もしくは抑揚に伴う動きや声を表出し、一方は表出された情動や動きや声を我が事のように受容し理解するというやりとり」と定義する。

第1章 乳児保育におけるわらべうたへの着目

論文検索サイト CiNi によって、「乳児保育」と、「3歳未満児」「保育」の2語とを用いてそれぞれ検索し、学会発表や雑誌記事、及び医療などの保育領域以外のものを除外して研究動向を概観したところ、2013年以降、論文数が急増し、保育所保育指針の改訂や保育士養成課程の見直しがあった2018年前後が最も多かった。このうち2018年以降の論文175本の約3割は実践研究であったが、実践研究の中でも子ども理解や子どもの関係性といった複雑で目には見えにくいものを対象とした研究は、9例しか見当たらなかった。

子どもと保育者との関係は、保育の質を捉える指標の頂点とされ（諏訪・金田1994）、保育の質に影響を与えていることが示唆されてきた（遠藤, 2020）。保育者だけではなく子どもも保育者の情感を感じ取って行為を調整するという相互に依拠した関係であり（長野, 2021）、親密で情緒が調和した状態が子どもの発達に適していること（大方・玉置・マクミレン, 2015）や、身体的同調⁵をもとにした集合的記憶⁶が共同想起されるような親密な関係性が子どもの主体性を補償すること（菊池, 2021）が示されている。

⁵ 身体的同調には、一方の身体リズムに他の身体リズムが引き込まれ、他者をなぞることによって同一化に向かう同型的同調と、同型的同調が深められて内化し、能動と受動が交換あるいは反転して両者の区別が曖昧になる相補的な応答的同調がある（岩田, 2007）。菊池（2021）では主に同型的同調のことを指している。

⁶ 岩田（2007）は、伝承遊びは、場所や時間などの状況に対する共振と遊びの同調、遊び仲間との同調が、身体において不可分に結びつき、遊び仲間において身体的に記憶されると述べる。このことを、岩田（2007）は集合的記憶と呼んでいる。

乳児保育における音楽的相互作用に関する実践研究では、子どもの気持ちの高ぶりに連動してその子どもに拍節的な表現が出現すること（白石，2006），保育者や他の子どもへの模倣や共振⁷が生まれること（持田，2010），母親や保育者との関係が深まることでコミュニケーションとしての音楽表現が生まれること（小山，2004）などが明らかにされてきた。音楽的相互作用の中でも、とりわけわらべうたをうたい合うことは、子どもの育ちを支える（湯澤，2020）と考えられ、子どもの自己制御（長崎，2006）や集団としてのまとまりに向かっていくこと（駒，2017；白石・齋藤，2021）が示唆されてきた。しかしこうした研究の多くは自然観察をもとに行われているため、遊びの様子や子どもの表情、身体の動きなどは丁寧に描かれていても、当事者以外にはわからないような感情の機微までは描かれておらず、うたい合うことによって子どもと保育者との間にどのような関係が構築されていったのか、またうたい合うことが関係構築にとってどのような意味があったのかといった点も捨象されている。

一方、保育者としての経験の記述をもとに、わらべうたをうたい合うことによって子どもと保育者との関係構築を示唆した研究（横山，2001；横山；2002；和田，2008；本岡・七木田，2018；本岡，2019a；本岡，2019b；本岡，2021）もあり、わらべうたのうたい合いが、子どもと保育者との関係構築に対してなんらかの意味を持つ可能性があることが明らかとなっている。しかしこれらの研究は、幼児の保育実践（横山，2001；横山；2002）や、対象児が限定されているもの（和田，2008；本岡・七木田，2018；本岡，2019a；本岡，2019b；本岡，2021）であり、研究の余地がある。本研究では対象児を限定せずに、乳児保育における子どもと筆者とのわらべうたのうたい合いそのものを対象として研究を行うことで、関係的な側面からみたわらべうたをうたい合うことの意義を見出したいと考える。

第2章 自己の経験への焦点化

自己の経験をもとに研究を行う上で共通するであろう課題、自己の経験をもとにした研究が目指すべきものとは何か、研究者の主観性をどう扱うべきか、一事例を検討することにどのような意義があるかの三つを検討した。

自己の経験をもとにした研究が目指すべきものとは何かを検討するにあたり、「ポスト実証主義的パラダイム」及び「解釈主義的パラダイム」による研究が何を目指しているのかということを概観した。その結果を踏まえ「ポスト実証主義的パラダイム」において自己の経験をもとに研究を行う場合は、読者のケースにも適用可能となるような知を構築することを目指すべきであると考えた。そのためには、どのようなケースであればこの理論を適用することができるのかどうかを、丁寧に論述する必要がある。どのような自己であるのか、一

⁷ 共振とは、対象児が自発的に身体を使って動かし、関係性において相手とリズムを合わせること（持田，2010）である。

一つがどのような事例であるのかといった、自己や事例が持つ特殊性をも書き込む必要がある。こうして様々なケースによる理論を寄せ集めることで、現象そのものを立体的に浮かび上がらせていくことができる。そして自己の経験も、その現象の一例にすぎないという自覚を持つことが重要である。

また「解釈主義的パラダイム」において自己の経験をもとに研究を行う場合は、意味生成によって理解が読者と共有されること、いわば読者との共通理解に開かれる知の構築が目指されるべきであると考えられる。それには、読者を触発する（山竹，2015）必要がある。読者を触発する経験の中にある触発力を持つ現象とは、リアリティが生起する構造のことであり（村上，2016，p. 228），あらゆる場面に共通することはないし，もう二度と起きることはないかもしれないが，そういうこともありうるという可能性があるものである（村上，2016，p. 228）。そしてそれは，研究者自身の身体において受け取ったものによって（村上，2016，p. 231）伝えられる。ただし，こうした経験を分析する場合には，その経験からある種の距離をとって分析する必要がある（村上，2016，p. 230）。

質的研究における研究者の主観性の扱いに関しては，やまだ（2020）が，事例選択において「一般化可能性」「再現可能性」を自覚した上で選択理由を記述する必要があること，データ解釈において研究者の恣意性や主観性が混入しやすいことに言及していた。また大谷（2019，p. 179）は，質的研究におけるデータの分析には，分析者の省察可能性があることと，読者による反証可能性があることの二つが必要であると述べた。これらを踏まえると，データそのものが研究者の経験の記述である，自己の経験をもとにした研究は，研究方法をより明確に示す必要があるのではないかと考えられる。つまり，事例選択や解釈の理由を丁寧に記述することで読者の反証性を担保することである。さらに言えば，そもそも選択したデータではなく全てのデータから理論を立ち上げて，その例として事例を挙げるような研究の方法論を確立する必要がある。

一事例研究には，モデル化（理論化）を目的に行う研究と，個別事例に見られる現象の把握を目的に行う研究の二つがある（荘島，2008）。現象の深い理解や実践に寄与する知が生成される可能性がある（荘島，2008）一方，その事例の生のありようを描くことにどのような意義があるのか，一事例研究による機能的な検討でモデル化が可能なのかという論点を提示した。これらの点に関し，読者がそれを読むことによって自分と他者の文化や状況の差異を理解し（河野，2014），読者自身の認識の拡張が起きるといった意義があること，他者への転用可能性によってモデル化が可能であることを述べた。しかし，分析における事例との距離の取り方や研究の妥当性に関する議論などが不十分であり，一事例であるからこそその理論的枠組みを検討する必要がある。

以上を踏まえ，自己の経験をもとにした保育研究の批判的検討を行った。自己の経験をもとにした保育研究には，保育者としての研究者自身の内面が如実に現れ，その経験の当事者にしかわからないような感覚，例えば保育性といった保育に関するものの考え方（佐藤，2011）や，子どもの内面の変容とかかわる保育者の行動の意味（山崎，2010）などが

描かれていた。このような自己の経験の記述に基づく保育研究は、一定の評価がなされながらも（榎沢，2018a；榎沢，2018b），方法に関する疑念（鳥光・北野・山内・中坪・小山，1999）や不備があることが指摘されていた（濱名，2018；安部・吉田，2020；安部・吉田，2021a；安部・吉田，2021b）。よって，こうした批判を乗り越え，自己の経験をもとに保育研究を行うための理論的枠組みを整理するとともに，方法を確立する必要があると考えられる。

第3章 理論的枠組み

（1）経験的現象学の枠組み

第2章で指摘した，自己の経験の記述をもとに行う研究の不備を補うための理論的枠組みとして，本研究は現象学的方法の中でも，Eugene T. Gendlin(1926-2017)の「経験的現象学」に依拠する。それは「経験的現象学」が，第2章で指摘した方法的な不備のみならず，二者のあいだで起こった経験をどう捉えるのかといった課題や，言葉の使用に対する研究者の恣意性も乗り越えることができるからである。

「経験的現象学」の考え方の最も中核にあるのが，「interaction first」という考え方である。Gendlin（2004a）は「身体は環境との相互作用のプロセスであり，身体はその状況である」と述べ，人は相互作用を通して生物として構成され，環境との相互作用によって行動が生まれるという立場から経験をとらえた。相互作用のプロセスがそもそも先にあって，そのプロセスによって生命体としての身体があると考え，二者のあいだの一致を問題とする必要がなくなるのである。

さらに，その経験が述べられている過程でそれを研究すること（Gendlin，1973，p. 291），すなわち，なぜその言葉が用いられたのかということを探求するという立場に立つことで，記述に関する問題を克服した。具体的には，言葉にしたいその経験を直接指し示し（直接参照），そこでの言葉の現れ方に気づき（認識），経験の新たな側面を提示し（比喩），既存の単語を新しい配置で構成する（理解）ことである（Gendlin，1973，p. 293-297）。Gendlin（1973，p. 290）は，現象をあるがままに記述するというこれまでの現象学の姿勢を批判し，経験は言葉によって影響を受けうるものであると考え，言葉が経験を基底するものであるという新たな見方を現象学に提供した。

本研究はこのような「経験的現象学」に依拠し，他者と共有可能で普遍的な知と言えるかどうかは言語化の過程にあると考えることで（諸富，2009，p. 133），自己の経験をもとにしながらも，普遍的な知としての意味や，その中でも最も本質的なものとしての意義に接近することが可能になると考えた。

（2）TEAを用いた分析

Gendlin（2004b；2004c）は，経験の意味を言語化し，理論化するための質的研究の方法として，THINKING AT THE EDGE(以下TAEと表記する)を考案した。TAEは，すぐに言葉にはで

きない感覚を研究者のフェルトセンス⁸をもとに、新しい用語を用いて言語化する系統立てられた方法である。TAEは、次の3つのパート⁹に分けて説明することができる。

パート1では、データから感じられたフェルトセンスをもとに、感じられた意味の中心を掴み取るようにして、マイセンテンス¹⁰という短い文にする。この時、体験過程¹¹と言葉とを行き来することによって言葉を選びとり、選び取られた言葉によってマイセンテンスを構成する。パート2ではデータからパターン¹²を取り出し、且つ、交差¹³を行うことでデータにはないが可能性として起こりうる新たなパターンを創出する。パターンにすることで、経験そのものから分離して考えられるようになり、現象をパターンで説明することが可能となるのである。パート3では生み出された概念を用いて、理論化¹⁴を行う。さらに、できた理論をパターンによって説明したり、図やメタファー¹⁵を用いて提示したりすることによって、読者との共有を図る。

このような3つのパートからなる14のステップに細分化された思考過程を経ることで、概念の構造化による理論構築ができると考えられている(得丸, 2010, p. 36)。本研究では、分析シート(得丸, 2010; 得丸・小林, 2015)¹⁶を用いて分析を行う。なお、具体的な分析過程は各章ごとに詳述した。

分析にあたっては、筆者の内面も含めた経験の記述である「エピソード記述」¹⁷(鯨岡, 2013)を実例として採用した。これ以降、「エピソード記述」に記載された筆者を分析のた

⁸ フェルトセンスとは、はっきりと身体に感じ取られる曖昧な辺縁(a distinct bodily-felt unclear edge)のことである(Gendlin, 2004c)。フェルトセンスは、うまく言葉にできないけれども何かしら意味があると感じられる(得丸, 2010, p. 164)。言葉にできないということは、既存の言葉では説明不可能ということである。経験的現象学では、こうしたフェルトセンスをもとに、意味の中心を言葉にしていくことが目指されている。

⁹ Gendlin (2004b; 2004c)では、パートという呼び方はしていないが、わかりやすくするために得丸(2010)ではパートに分けている。本研究もこれに倣った。

¹⁰ フェルトセンスを短い一つの文にしたもの。Gendlin (2004c)では、言語的には通常ではないような文となっている。既存の言葉では説明不可能な事柄を言語化するという意図が、ここにはある。

¹¹ 体験過程とは、経験が持つ、感じられたという側面及び、具体的な感覚のことであり、経験の持つ論理的な概念とは区別されている(Gendlin, 1962)。

¹² パターンとは、そのフェルトセンスの一つの側面であり、側面内の細部の関係のことである(得丸, 2010, p. 37)

¹³ 言葉を使用するとき、実際の状況とその言葉の意味が交差されることで、一つの言葉の使用が決定される(Gendlin, 1995)。このように人は、状況と言葉のように、一つのものの中に別の一つのものを見出そうとする。このことを交差と呼んでいる。

¹⁴ TAEにおける理論とは、概念の構造体のことである(得丸, 2010)。

¹⁵ メタファーを用いることで理論の動きや構造が捉えられ(得丸, 2010)、読者がより明確に理解したり洞察を深めたりすることができるようになる(土元・小田・サトウ, 2020)。Gendlin(1995)は、メタファーは交差であると述べている。

¹⁶ TAEによるデータ分析のために開発されたものである。本研究では、得丸(2010)、TAEリフレクシオン質的研究法TAE(<http://www.tae.japan.org/>)(得丸・小林, 2015)で紹介されているものを使用したほか、分析に合わせて筆者が作成し、使用した。

¹⁷ エピソード記述とは、関与観察の中で自らの身体に響き、心が揺さぶられるような意識体験を、背景、エピソード、メタ観察(考察)に分けて書き記したもの(鯨岡, 2013, pp. 241-249)。

めに取り出す際には、これまでわかったつもりでいたことを問い直す（藤井，2019，ix）という意味で鉤括弧付きの「私」と表記する。また、筆者が記述した「エピソード記述」は鉤括弧なしのエピソード記述と表記する。

第4章 研究の対象と方法

本研究の対象は、H市A認定こども園で乳児保育を受ける子どもと、筆者であり保育者であった「私」のわらべうたのうたい合いである。全156のエピソード記述を分析の対象とした。研究対象に関わる概要等は、表2の通りである。なおプライバシーに配慮して、保育者及び子どもの名前は全て仮名とした。

表2 研究対象等の概要

対象園	観察期間	該当クラス	乳児クラスの 保育者構成	「私」の立場	エピソード記述数
A認定こども園 (20XX年時点、乳児保育歴5年の園)	20XX年5月～ 20XX+1年3月	0歳児クラス 6名 1歳児クラス 15名 2歳児クラス 15名	・担任1名・補助1名 ・担任2名・補助2名 (このうちの一人が「私」) ・担任2名・補助2名 ・全体補助として2名	7年間勤務したうち、20XX年は7年目だった。大学院との両立のため、7時半から12時半まで週4回程度の勤務中に観測を行った。	156例

研究にあたっては、『改訂 保育学研究倫理ガイドブック』（一般社団法人日本保育学会倫理綱領ガイドブック編集委員会，2012）を参照し、以下の倫理的配慮を行った。第一に、H市A認定こども園の園長及び職員に研究の同意を得た。その上で、研究内容に関する説明書を保護者に配布した。承諾できない場合でも、子どもや保護者に不利益が及ぶことがないこと、承諾できない場合は申し出てもらいたいことも伝えたが、申し出はなかったため、研究への承諾を得たと判断した。第二に、広島大学の倫理審査委員会に公表に関する倫理審査を請求し、承認を受けた。第三に、プライバシーに配慮して、園名、職員名、子どもの名前は仮名を使用し、研究に支障がない範囲（兄弟の性別など）で改変を行った。匿名性を担保することで、協力園や職員、子どもに不利益がないよう配慮した。

第5章 音楽的相互作用によって構築される関係性

(1) 目的と分析手順

本章の目的は、乳児保育における子どもと保育者であった筆者がわらべうたのうたい合った経験の質感¹⁸を描くことにより、音楽的相互作用によって構築される子どもと保育者との関係性を明らかにすることである。TAEのパート1を行うことで、経験の質感を言語化した。経験の質感に着目することで、関係性のありようが浮かび上がるとともに、読者の理解が知的なレベルにとどまらずに、わが事のように理解する道に開かれる（町田、

¹⁸ 質感とは「出来事に伴われる固有の感覚や実感」のことである（町田，2022，p.71）。

2022, p. 104) と考えた。具体的な分析手順は以下のとおりである。

まず、子どもと「私」がわらべうたをうたい合った経験のエピソード記述を読み返し、内包するテーマ¹⁹を同定した。次に、テーマごとに読み込んだエピソード記述の質感をフェルトセンスとして感じ、分析シートを用いてマイセンテンスとして言語化した。さらにそのマイセンテンスを、当時のエピソード記述を用いて新たに再構成したエピソード記述の形式で説明した。

(2) 分析結果の概要

156 例のエピソード記述からは、12 のテーマが見出された。内容の近いテーマ同士をまとめ、それぞれに「ゆるみ」「なぐさめ」「能動性」「楽しさ」「与格」の 카테고리名を命名した(表3)。分析シートを用いて、テーマごとのマイセンテンスと質感を導き出した(表4)。再構成したエピソード記述は紙幅の都合上割愛する。

表3 テーマによる分類のまとめ

カテゴリー	テーマ	数	数	全体数
ゆるみ	雰囲気	6	46	156
	気持ちの落ち着き	18		
	身体のゆるみ	22		
慰め	慰めになった	21	36	
	慰めにならない	5		
	慰めになったのかどうか	10		
能動性	うたい遊ぼうとする	17	33	
	うたい合うことを拒否する	16		
楽しさ	楽しさが引き出される	20	21	
	楽しさが引き出されない	1		
与格	通じ合う	16	20	
	思いが引き出される	4		

表4 テーマごとのマイセンテンスと質感

カテゴリー	テーマ	マイセンテンス	質感
ゆるみ	雰囲気	大きな波に解け、届く	うたに触発されて、波のように繰り返されるうたに、子ども自身が解けていくように交わっていく。その交わり方は、はっきりとしたものではなく、無意識で、気づけば一体になっていたというようなものである。そのようにして、子どもが波のように繰り返されるわらべうたに身を委ねて、わらべうたに浸りながらその場を漂っている。そこで醸し出されているのがこの感じであり、その子自身にも「私」にも、さらに遠くにまでも届いている。
	気持ちの落ち着き	撫でられて包みこまれ運ばれる	子ども自身の中には自分ではどうすることもできないものがあり、それが表に現れているときにうたわれると、声や揺れ感によってうたに撫でられるようにして、そのどうすることもできないものが包みこまれる。包みこまれたものごと、子どもの心も体もそこから運ばれて行き、運ばれた先で安定する。

¹⁹ テーマとは、概念にたどり着くための手段であり、その概念の内容の記述であるとともに一つの縮図である (van Manen, 1997)。

	身体 の ゆるみ	錘を預けて浮かぶ	それまでの歴史に基づいて、子どもは「私」への信頼感を持っている。「私」のうたを感じて身を委ねることで、自分を縛っていたものがほどけていく。「私」への安心感に満たされて、自分の中にある錘を預けてしまうことで、心も体も軽くなっていく。このようにして、よりどころは確保しながら、自由に漂うように浮かんでいる感じである。
楽しさ	楽しさが 引き出さ れる	つながりの種が芽吹く	もともと子どもが持っているつながりの中心になる種のようなものが、うたに合わせて、「私」と子どもとの間を行ったり来たりする。最初はごく小さくてささやかな種だけれど、行ったり来たりするうちに、「私」への安心感によって柔らかくなって、中に詰まっているつながりの芽が育って、種が膨らんでくる。そしてそれがついにほころんで、芽吹く感じである。
	楽しさが 引き出さ れない	—20	—
慰め	慰めにな る	くぼみが満たされて持ち 上がる	悲しいことがあると子どもの心には、くぼみができる。そのくぼみのちよどの場所にびつたりうたが流れ込み、あたたかいものやおもしろいもので満たされて、子どもの心は軽くなって持ち上がる。
	慰めには なら ない	殻を固く閉じ、葛藤の中で 振り払う	その子が求めているものに近いものが、うたという形で与えられるが、本当に求めているものとは違うために、葛藤を生んでしまう。うたを受け入れてしまうと、本当に求めているものは手に入らないことをわかっているのだから。うたを受け入れないように固く殻を閉じ、それでもうたを受け入れてしまいそうになりながらも葛藤の中でうたを振り払うことで、本当に求めているものに近づこうとする感じである。
	慰めにな ったのか どうか	透明な存在に覆われてい ることを感受している	うたう「私」も、「私」によってうたわれるうたも、その子の心の中に確かに存在していて感じ取ってはいる。その存在の仕方は、表面的で透明なものであり、奥まで浸透していくようなものではない。全体を覆うようにして存在しているだけで、その時には深くまで浸透していないが、塗り重なることでいつかもっと深いもの に変わっていく可能性を秘めている。
能 動 性	うたい遊 ぼうとす る	巻き込みながら調和する	その子の躍動感や情動、うたの拍節感、わらべうたに対する欲求が体の奥から湧き上がるようにその子自身の身体を動かす。身体表現として現れるからこそ空気の中に溢れ出て、目には見えない波のように伝わり、渦のように周りを巻き込み、さらにそのうたと調和しながら身体を動かす感じである。
	うたい合 うことを 拒否する	留まろうとしがみつき、浄 化している	うたい合うことによって自分の気持ちが変化することを恐れる気持ちや、「私」という安心感から引き離されるのではないかという不安から、不快な感情を絞り出し、自分の気持ちや「私」との関係にしがみついている。感情がいったん崩れることで子ども自身を浄化している感じである。
与 格	通じ合う	沈殿物が見える至福を守 りたい	何気ない毎日の中に溶け込んでいる「私」と子どもとのわらべうたは、お互いの中に蓄積されて、大事なものが沈殿していつか。その沈殿物は、普段は気づくことがないけれど、ふとした出来事の中で、その場でだけ見ることができる。「私」が子どもの沈殿物を、子どもは「私」の沈殿物を照らすようにして。そうやって照らされて見えた時は、「私」にも子どもにも至福の時であり、それを誰にも邪魔されたくない、こわされたくない、守りたい、という感じである。
	思いが引 き出され る	形作っているものがこぼ れ落ちた波紋	知らず知らずのうちにその子を形作っていたものが、わらべうたをうたい合う「私」とその子どもとの間にこぼれ落ちる。こぼれ落ちたことで、それがなんだったのかが、波紋のようにじわじわと伝わってくる。

(3) 考察

結果より、音楽的相互作用において構築される子どもと保育者との関係性は、以下のようなものではないかと考えられる。

第一に、「身を委ねて自由に振る舞い、ポジティブな感情表出が可能となるような関係性」である。「Communicative Musicality」における Pulse の観点から見ると、拍に合わせたタッピングや揺り、うたと身体の同期、Quality の観点からみると旋律の落ちつき、

²⁰ 楽しさが引き出されないというテーマのエピソード記述からは、子どもにとってどのような経験だったのかというフェルトセンスが感じられなかった。そのため、記載をしていない。なお本文では、「私」にとってどのような経験だったのかというフェルトセンスを記述している。

Narrative の観点からみると、うたの雰囲気との同調、遊びの要素やオチの面白さ視覚や触覚の刺激、といった要素を持つ音楽的相互作用の繰り返しによって、このような関係性が構築されると考えられる。

第二に、「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」である。こうした関係性は、その状況の文脈や子どもの葛藤状態、互いの関係性や執着心、情動の伝播や、意図性といった、「Communicative Musicality」の観点で言えば、Narrative との関連が強く、他の観点との関連は低いと考えられる。幼児期の子どもにおいては、互いの関係を調整しようとするとき、音楽表現が生まれる（矢部，2012）が、ここでの関係性は互いを調整するというようなものではない。むしろ一旦崩すことで音楽的相互作用を引き出すことが許されるような関係である。よってこうした関係性が、わらべうた以外の音楽的相互作用においても生まれるかどうか、つまり、別の音楽的相互作用においても形成可能なものは、断定することはできないだろう。乳児保育に関する先行研究によれば、保育の積み重ねが子どもの欲求となり、その欲求が泣く行為として現れる（佐々本・大方，2016；佐々本・大方 2017）ことから、乳児保育における子どもと保育者という関係に依存している可能性があり、さらには音楽的相互作用の中でも、わらべうたに特有の関係性である可能性もあるだろう。ただし、他の音楽的相互作用でこうした関係性が形成できないとは言い切れず、音楽的相互作用の中に含意されているということができるだろう。すなわち、顕在化するかどうかは条件次第であるものの、可能性として起こりうるということである。

第三に、「周囲の他者を巻き込みながら他者と調和したり、新たに他者との関係を築こうとしたりすることに向かうような関係性」である。こうした関係性は、

「Communicative Musicality」における Pulse の観点からみると、拍節的なりズムや躍動感の表出、共振、身体的同調、拍の共有による身体的一体感、Narrative の観点からみると情動、うたい遊ぼうとする意志、情動の揺さぶり模倣が関連して構築されると考えられる。Quality との関連は、拍感に合わせた身体の動きなどが含まれるマルチモーダルな性質という部分で見出したのではないかと考えられる。

以上の三つの関係性が明らかとなった。ただし「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」は、顕在化するかどうかは Narrative に依存し、音楽的相互作用の中に含意されている。「身を委ねて自由に振る舞い、ポジティブな感情表出が可能となるような関係性」や「周囲の他者を巻き込みながら他者と調和したり、新たに他者との関係を築こうとしたりすることに向かうような関係性」といったポジティブな関係性と、顕在化するかは Narrative に依存するものの「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」という、どちらかといえばネガティブな関係性は、矛盾する関係のようにも感じられる。しかし Narrative の中で揺さぶられることによって波紋のように広がり、構築されるというよりはむしろ、気付けばそうとしか言いようのないような関係として子どもと保育者とを結び

つける可能性があるところに、音楽的相互作用における関係性の特徴があるのではないかと考えられるのである。

第6章 音楽的相互作用に通底する意味

(1) 目的と分析手順

本章の目的は、子どもと保育者であった筆者のわらべうたをうたい合った経験から、乳児保育における子どもと保育者がわらべうたをうたい合うことの意味とその構造を明らかにし、そこから音楽的相互作用に通底する意味を導き出すことである。TAEのパート1からパート3までを行うことで、子どもと筆者の固有の経験に潜んでいる本質的な意味を導き出す。そして、そこで明らかになった意味が、わらべうたに限らず、音楽的相互作用にも言えることなのかどうかを吟味することによって、音楽的相互作用に通底する意味を導き出したいと考える。

まず、わらべうたをうたい合う経験とはどのような経験だったのかをよく感じ直し、フェルトセンスとして持った後、マイセンテンスとして短い言葉で言語化した。ここまでがパート1である。次に、わらべうたをうたい合う経験が持つパターンを取り出し、且つ、パターン同士を交差させることによって新たなパターンを創出した。得られたパターンをもとに、わらべうたをうたい合うこととは何かを、文章としてまとめた。ここまでがパート2である。さらにパート3で、わらべうたをうたい合うことの意味としてシンボル化された言語同士の関係性を探り、ある言葉を同じシンボル化された別の言語で言い換えることを繰り返すことによって、わらべうたをうたい合うことの意味を言語と図を用いて構造化した。さらにその構造を、パート2で導き出したパターンを用いて説明し、最後にその構造をメタファーで表現した。

以上の分析に基づき、音楽的相互作用に通底する意味とは何かを明らかにした。

(2) 分析結果の概要

パート1の分析の結果、子どもと「私」のわらべうたをうたい合う経験のフェルトセンスは、「揺るぎない踏み台を作る営み」というマイセンテンスになった。パート2の分析結果、全てのエピソード記述は179場面のうたい合いの場面に分けられ、27のパターン及び、パターン同士の交差による417の新パターンが生成された。これらを用い、わらべうたとは何か、うたい合う「私」とはどのような存在なのか、うたい合う子どもとはどのような存在なのか、「私」と子どもとの間にあるものとはどのようなものなのか、うたい合うこととはどのようなものなのかを説明した。パート3の分析結果、わらべうたをうたい合うことの意味は、「結ぶ」というささやかな願い、「いきいき」とした身体の動きによって「全身全霊」で「応える」という「循環」、「喜びの実感」が湧き上がり「ほとぼしる」こと、いつか「離れる」ことを受け入れることの四つからなることがわかった。この四つを用いた構造図を描き、わらべうたをうたい合うことのメタファーとして、「足踏みろくろ」を採用した。

以上をもとに、音楽的相互作用に通底する意味を考察した。

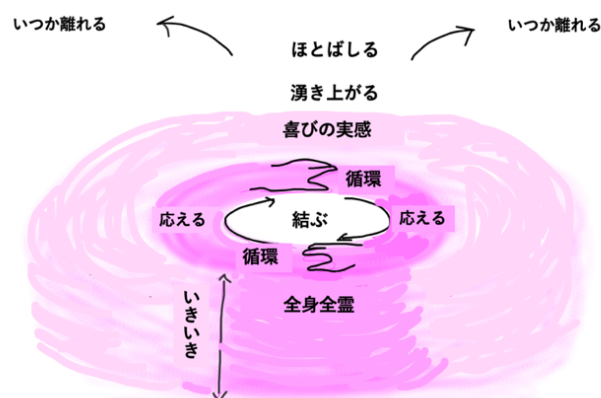


図1 わらべうたをうたい合うこと（つながる）の構造体

(2) 考察

一つ目の「結ぶ」というささやかな願いには、一対一での身体接触を伴った安心感や心地よさを相互に求め合い、精神的な苦痛の緩和やその子の対人関係の育ちを願うという意味があった。音楽的相互作用においては、必ずしも一対一での身体接触があるわけではないが、乳児保育においては一対一、もしくは保育者一人に対して複数の子どもでの身体接触が伴う場合が多い。このような状況において、保育者自身が子どもの精神的な苦痛の緩和やその子の対人関係の育ちを願うという気持ちを持つ場合もあるだろう。よって、「結ぶ」というささやかな願いというのは、こうした、その時の状況や保育者の気持ちに依存した意味であると考えられる。

二つ目の、「いきいき」とした身体の動きによって「全身全霊」で「応える」という「循環」には、子どもが主導権を握り保育者が維持することで、子どもに、対人関係を構築していくための踏み台や、生きていく原動力をもたらすという意味があった。子どもの「いきいき」とした身体の動きとは、白石（2006）にあった、保育者のうたが作り出す時間のまとまりをフレーズとして感じ取り、予測し、そこに自らの身体の動きを対応させてまとまりのある動きとして表すような動きや、拍節的なリズムの表れと同様なものであると考えられる。さらに、「全身全霊」で「応える」という「循環」とは、持田（2010）のいうところの共振に近いものであり、子どもと保育者が拍感を合わせて身体の動きを繰り返し行うことである。こうした拍感に伴う身体の動きはわらべうたに限ったものではなく、他の音楽的相互作用にも共通するものである。よって、「いきいき」とした身体の動きによって「全身全霊」で「応える」という「循環」によって、対人関係を構築していくための踏み台や、生きていく原動力をもたらすということは、音楽的相互作用に通底する意味であると考えられる。ただしこの意味が音楽的相互作用に通底するかどうかは、保育者が主導するのではなく、あくまで子どもが主導権を握り保育者が維持するという保育者の姿勢や、信頼関係の中で受け止めてもらうといった日常の安定感（細田・小野，2003）にかかっているとと言えるだろう。

三つ目の「喜びの実感」が湧き上がり「ほとぼしる」ことには、子どもと保育者の関係を

強く結びつけるとともに、他者をも惹きつけ、対人関係を拡張させるという意味があった。

「喜びの実感」は、音楽的相互作用において子どもが感じる、他者と呼吸を合わせて唱える心地よさ（岡林，2003）や、自分の音楽表現に呼応してもらい喜び（小山，2004）と同様であると考えられ、それが子どもだけではなく保育者、さらには周りの他者にも感じ取れるということである。こうした「喜びの実感」が湧き上がり「ほとばしる」ことが、子どもと保育者の関係を強く結びつけ、他者にも感じ取られることで対人関係が拡張することは、音楽的相互作用に通底する意味であると考えられる。しかし、喜びの種類によっては、音楽的相互作用や乳児保育に限ったものではないため、「喜びの実感」が、前述したような呼吸を合わせて唱える心地よさ（岡林，2003）や音楽表現に呼応してもらい喜び（小山，2004）といった音楽的相互作用と関連がある喜びであることを、提示する必要があるだろう。

四つ目のいつか「離れる」ことを受け入れることは、関係性の成熟の結果として、保育者が、子ども同士の関係や、その子どもと他の保育者との関係の後景に退くという、新たな関係性へと変容する分水嶺としての意味があった。音楽的相互作用の研究からは、分離に対する示唆はなく、乳児保育研究においても、子どもと保育者との分離と、音楽的相互作用の関連は見出されてはいない。ただし、子どもにとって最初に出会った保育者との関係性が、後の子ども集団との関係の安定性や継続性に影響を与える（Howes, Hamiltpn, & Philipsen, 1998）ことや、子どもと保育者とのアタッチメントによって、子どもと保護者のアタッチメントが改善する（上田・山崎，2003）ことが明らかとなっており、子どもと保育者との強い結びつきは、分離をふくみつつ、子どもの別の対人関係や親子関係に影響を与えられ考えられる。音楽的相互作用を行う保育者の中に、一つ目に示した子どもの対人関係の育ちに対する願いがある場合は、わらべうたに限らず他の音楽的相互作用においても、いつか「離れる」ことを受け入れることで、関係性の成熟の結果として、保育者が、子ども同士の関係や、その子どもと他の保育者との関係の後景に退くという、新たな関係性へと変容する分水嶺としての意味を持ちうるのではないかと考えられる。

以上より、音楽的相互作用の意味とは、第一に、子どもが主導権を握り保育者が維持するという関係の中で、互いが音楽性を感じ取り、拍節感に伴う身体の動きを相互に繰り返すことで、子どもに対人関係を構築していくための踏み台や、生きていく原動力をもたらすことである。第二に、呼吸を合わせて唱える心地よさや、音楽表現に呼応してもらいといった喜びの実感が、子どもと保育者とのあいだで伝わり合い同期することが互いの関係を強く結びつけるとともに他者にも共有され、子どもの対人関係を拡張することである。

また、一対一での身体接触を伴った安心感や心地よさによって精神的な苦痛を緩和し、その子の対人関係の育ちを願うことで互いの分離を受け入れ、保育者が子ども同士の関係の後景に退くことで子どもが新たな対人関係を構築していくことへと向かっていくという意味は、分離への意識や対人関係の育ちに対する願いがあるかどうか依存すると考えられる。だからといって、乳児保育におけるわらべうただけに限ったものであるとも言い切れず、対人関係の育ちへの願いや分離を意識した上で行う音楽的相互作用の場合には、こうした

意味が浮上すると考えられる。つまり、こうした意味が顕在化するか否かは対人関係の育ちへの願いや分離への意識に依存するものの、音楽的相互作用に含意されている意味であると考えられるのである。

終章 総合考察

(1) 乳児保育における音楽的相互作用の意義

乳児保育における音楽的相互作用の意義の一つは、音楽的相互作用によって構築される関係性が、子どもの、他者と共に生きていくための力を養うことである。

これまでの研究の中で、わらべうたのような音楽的相互作用においては、ノリ²¹（岩田，2008）のような一体感や、集団としてのまとまりに向かっていく姿（駒，2017；白石・齋藤，2021）が描かれ、大人が主導し子どもがそこに追随するような関係性が浮き彫りとなっていた。しかし本研究で明らかにした関係性は、むしろ子どもが主導し、周囲を巻き込みながらも調和するような生命力に溢れたものであり、自由でポジティブなものであった。また、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりするようなことのできる、一見すると子どもに振り回されているかのようなものになる可能性も秘めているものであった。保育の積み重ねが子どもの欲求となり、その欲求が泣く行為として現れる（佐々本・大方，2016；佐々本・大方2017）のである。こうした矛盾するかのような二つの関係性は、揺れながら波紋のように広がり、構築されるというよりはむしろ、気付けばそうとしか言いようのないような関係として違いを結びつけていた。そして、他者と共に生きていく原動力を養っていたのである。音楽的相互作用によって構築される関係性は、その場その時、その保育者とのあいだだけでの親密さや調和を志向しているのではなく、子どもの生活全般において様々に揺さぶられながら他者と共に生きていくことを志向するものであり、そうした関係性の中で子どもは、他者と共に生きていくための力を養っていくのではないかと考えられる。ただしそこには、音楽的成長にだけに収斂することのない、他者と共に生きていこうとする子ども自身の願いと、子どもの生活そのものの充実や他者との関係を構築してほしいという保育者の願いがあることが一つの条件になり、子どもの、他者と共に生きていくための力を養うという意義を持つと考えられるのである。

乳児保育における音楽的相互作用におけるもう一つの意義は、音楽的相互作用が分離を前提とした親密さを築き、子どもの対人関係を拡張する可能性があることである。これまで乳児保育研究においては、親密で情緒が調和した状態が子どもの発達に適している（大

²¹ ノリとは、「関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズム、およびその顕在の程度、すなわちリズム感、また身体と世界との関係から生み出される調子、気分のこと」である（岩田，2007；2008）。小川（2010）は、「ノリ」の原点が「Communicative Musicality」であり、保育者には子どもの「ノリ」に共鳴し維持することと、「ノリ」を潜在化することによって観察者として見取ることの2点が必要であると述べた。そして「ノリ」は、「一人一人の幼児の成長・発達を保障するという個性的人間関係を建前にしながら、幼児集団の生活全体を対象にしているという矛盾」への回答であるとともに、「保育者と幼児集団との同型的同調や同型的応答の成立」に寄与することを指摘した。

方・玉置・マクミレン, 2015) と考えられ, 親密さを醸成する集合的記憶を喚起するものとして, 絵本などの文化財が重要視されてきた(菊池, 2021)。つまり, 子どもと保育者との関係性においては, 親密であることが重視されてきたのである。しかし, 親子関係における親密さとの質的違いは明らかにされてこなかった。乳児保育における関係性が親子関係と違うのは, 分離が前提とされていることであり, だからこそ, 保育者は全身全霊で子どもに応え, 子どもも全身全霊で保育者に応えるという循環が生まれるのである。こうした分離を前提とした親密さに基づく関係性は, 同じ一つのうたを分有したつながりによって醸成されるため, 喜びの情動の共有や, 拍感の共有といった「Communicative Musicality」のスキルに基礎付けられて, 子どもの対人関係は拡張し, 別の他者との関係へと, 保育者から離れていくことができる。乳児保育において, 音楽的相互作用によって実現する親密さの帰結は, 保育者との分離及び, 対人関係の拡張なのである。

(2) 「子ども－大人」関係における音楽的相互作用の意義

「子ども－大人」関係における音楽的相互作用の意義とは, 第一に, 音楽的相互作用によって, 分離が含意された親密さを築くことで, 子どもの能動性や主導性を高めることができることである。これまで, ヒトは他の霊長類に比べてアロマザリング²²が発達している(根ヶ山・柏木, 2010)と言われてきたにもかかわらず, 「子ども－大人」関係は, アタッチメントのような緊密性や密着を基本とする関係性で説明されることが多かった。根ヶ山(2010)は, 親との分離がもたらす意義を, 周囲の社会的接触をもたらしこととし, 近年強まっている親の子どもに対する保護的関わりが, 子どもの能動性・主導性を総体的に減じることになるのではないかと警鐘を鳴らしている。このことは, 親子関係に限らず「子ども－大人」関係においても同様であろう。「子ども－大人」関係が親密になることと, 大人と分離することは, 決して相反するものではなく, 「子ども－大人」関係の親密さの帰結としての分離が重要なのである。

「子ども－大人」関係における音楽的相互作用の意義の第二は, 音楽的相互作用が, 互いに応えようとする思いや, 対人関係に関わる願いに基づいて, 「育とう」とする子どもと「育てよう」とする大人を生み出しながら, 他者と共に生きていこうとする営みになる可能性があることである。互いに音楽性を感じ取り, 拍節感に伴う身体の動きを相互に繰り返すことで, 安心感や心地よさ, 音楽表現に呼応してもらおうといった喜びの実感が同期し, それが他者にも伝わるといった音楽的相互作用は, その場の関係を親密にするだけではなく, 子どもに, 他者とともに生きていく原動力をもたらすものであった。それは, Stern(1985)が述べるような生気情動に対する調律を含みながらも, その場限りの力動的な変化だけを示しているのではない。また, Treverthen(1979)が示したような, 即時的な間主観的な相互作用だけで説明できるものでもない。音楽的相互作用がまずあって, 子どもの「育とう」とする育ちへの願いや, 大人の「育てよう」とする育ちへの「願い」

²² アロマザリングとは, 子どもを取り巻く母親以外の個体による世話行動のこと(根ヶ山・柏木, 2010)

がそれぞれを切り分けていくプロセスである。だからこそ、他者とともに生きていく原動力をもたらし、他者と共に生きていくことへと向かうものであった。しかし、そこに分離への意識や、他者との関係構築への願いがあるかどうかによって、他者と共に生きていこうとする営みになるかどうかが決まってくる。この点で、可能性という表現にとどめた。以上をもとに、本研究における音楽的相互作用を図示した（図2）。

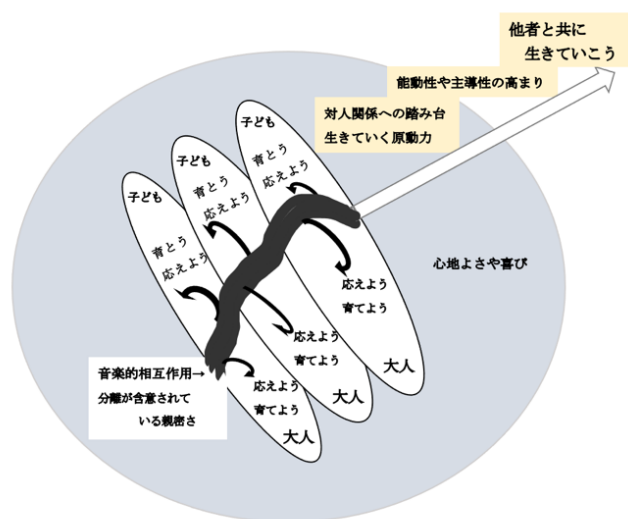


図2 音楽的相互作用

(3) 本研究の限界

本研究の限界は、以下の三点である。一点目は、わらべうた実践の直後に分析していないため、経験からの距離がとれ、実践者としての意図を含めずに研究者として分析できた一方で、直後に感じたであろうフェルトセンスが組み込めていないことである。二点目は、研究目的に鑑みて関係性に着目したため、子ども一人ひとりが抱えるや問題等が背景に退いていることである。三点目は、Narrativeを決定づけたものが何だったのか、PulseやQualityといった「Communicative Musicality」の要素なのか、それとも乳児保育におけるわらべうたという状況だったのか、といった点について吟味できなかったことである。そのため、「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」が構築されることは、どの音楽的相互作用にも言えることなのかは明確にできなかった。そこで本研究では、こうした関係性が生まれる可能性があるという、音楽的相互作用に含意されているという結論になった。

なお、TAEのパート3の最後であるステップ14は、作り上げた理論を自分のフィールドの中で説明し、これからの研究の中でさらに練り上げていくことである

(Gendlin, 2004c)。そのため、この研究は今後も続いていく。

引用文献

安部高太郎・吉田直哉（2020）鯨岡の「接面」の心理学における保育関係の非対称性．第30回日本乳幼児教育学会発表要旨集．26－27．

安部高太郎・吉田直哉（2021a）鯨岡峻による「接面」の人間学における間主観的な理解

- の非対称性. 敬心・研究ジャーナル 5 (1), 21-31.
- 安部高太朗・吉田直哉 (2021b) 保育者によるエピソード記述の契機としての〈感動〉－鯨岡峻の場合－日本教育学会大会研究発表要項, 80 (0), 49-50.
- 阿部ヤエ (1998) 遠野のわらべ唄の語り伝え 人を育てる唄. エイデル研究所
- Bernieri, F. J., Reznick, J. S., & Rosenthal, R. (1988) Synchrony, pseudosynchrony, and dissynchrony: Measuring the entrainment process in mother-infant interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54(2), 243-253.
- Cireli, L. K., Wan, S. J. & Trainor, L. (2014) Fourteen-month-old infants use interpersonal synchrony as a cue to direct helpfulness. *Philosophical Transactions of The Royal Society B Biological Sciences*. 369, 1-8.
- Eckerdal, P. & Merker, B. (2009) 'Music' and the 'action song' in infant development: An interpretation. *Communicative Musicality: Exploring the Basic of Human Companionship*, Oxford University Press. 241-262.
- 遠藤純子 (2020) 乳児保育の質をめぐる現状と課題－関係性をベースとした保育の展開に向けて－. 学苑・初等教育学科紀要, 965. 2-17.
- 榎沢良彦 (2018a) 展望 実践研究と主観性. 保育学研究, 56(2). 260-267.
- 榎沢良彦 (2018b) 現象学的方法. 保育フォーラム 保育学の研究方法論を考える (2). 保育学研究, 56(3). 242-244.
- 藤井真紀 (2019) 他者と「共にある」とはどういうことか 実感としての「つながり」. ミネルヴァ書房.
- Gendlin, E. T. (1962) *Experiencing and the creating of meaning: a philosophical and psychological approach to the subjective*. Free Press of Glencoe. (E. T. ジェンドリン著 筒井健雄訳 (1993) 体験過程と意味の創造. ぶっく東京.)
- Gendlin, E. T. (1973) *Experiential phenomenology*. In M. Natanson (Ed.), *Phenomenology and the social sciences. Vol. I*, pp. 281-319. Evanston: Northwestern University Press.
- Gendlin, E. T. (1995) Crossing and dipping: some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines* 5 (4), 547-560.
- Gendlin, E. T. (2004a) Five philosophical talking points to communicate with colleagues who don't yet know focusing. *Staying in Focus. The Focusing Institute Newsletter*, 4 (1), 5-8.
http://previous.focusing.org/gendlin/docs/gol_2187.html (最終閲覧 2022. 10. 4)
- Gendlin, E. T. (2004b) Introduction to 'Thinking at the Edge'. *The Folio*, 19 (1), 1-8.

http://previous.focusing.org/gendlin/docs/gol_2160.html (最終閲覧 2022. 10. 2)

Gendlin, E. T. (2004c) THINKING AT THE EDGE (TAE) STEPS, *The Folio*, 19.

(1) , 12-24.

<http://previous.focusing.org/pdf/TAE-Steps-From-The-Folio-2000-2004-crp. R6. pdf>

(閲覧日 2022. 10. 9)

Goldstein, M. H., Schwade, J. A & Bornstein, M. H. (2009) The Value of vocalizing :Five-month-old infants associate their own noncry vocalizations with responses from caregiver. *Child Dev.* 80(3), 636-644.

濱名潔 (2018) 保育研究における自己エスノグラフィーの可能性と課題 : 課題を解決する工夫としての日記と TEM の活用. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 教育人間科学関連領域, 67 .99-108.

細田淳子・小野明美(2003) 言葉の獲得期における音楽的表現—乳児はどのようにしてうたい始めるか—. 保育学研究, 41 (2) 58-65.

Howes, C., Hamilton, C. E., & Philipsen, L. C. (1998) Stability and Continuity of Child-caregiver and Child-peer Relationships. *Child Development*, 69. 418-426.

市川恵 (2020) 文化の中の歌い合い. 私たちに音楽がある理由【音楽性の学際的探究】.

(今川恭子 編著). 音楽之友社. 209-221.

今福理博・大橋喜美子・明和政子 (2016) 大人の発話スタイルが乳児の顔注視行動に与える影響: 歌いかけ (Infant-Directed) に着目して. 音声研究, 20(2), 48-57.

今川恭子 (2020) 音楽性の発達的な変化: 第一次音楽性から第二次音楽性へという仮説. 私たちに音楽がある理由【音楽性の学際的探究】. (今川恭子 編著). 音楽之友社. 196-208.

一般社団法人日本保育学会倫理綱領ガイドブック編集委員会 (2012) 改訂 保育学研究倫理ガイドブック.

岩田遵子 (2007) 現代社会における「子ども文化」成立の可能性—ノリを媒介とするコミュニケーションを通して—. 風間書店, 78-88.

岩田遵子 (2008) 逸脱児が集団の音楽活動に参加するようになるための教師力とは何か—ノリを読み, ノリを喚起する教師力. 音楽教育実践ジャーナル, 5(2). 12-18.

蒲谷慎介 (2020) 親子のはざまを繋ぐもの: 「音楽性」の観点がもたらす展望. 私たちに音楽がある理由【音楽性の学際的探究】. (今川恭子 編著). 音楽之友社. 51-64.

梶川祥世・黒石純子 (2011) 母親音声に対する乳児の心拍反応: 歌唱と朗読の比較. 玉川大学脳科学研究所紀要, 第4号, 11-17. 菊池, 2021

菊池里映 (2021) 1歳児の絵本読み場面における主体的行動—モノ・人・子どもの関係に蓄積される集合的記憶の想起—玉川大学教師教育リサーチセンター年報 11(臨時増刊号) 31-44.

駒久美子 (2017) 乳児保育とわらべうた —かしのき保育園. 音楽教育実践ジャーナル, 15. 125-128.

- 河野哲也 (2014) 対話による人間の回復：当事者研究と哲学対話. 社会福祉研紀要, 33. 3-14.
- 厚生労働省 (2022) 保育所等関連状況取りまとめ.
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_27446.html (最終閲覧 2022. 10. 7)
- 小山朝子 (2004) 乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現—未満児の事例を通しての考察—. 保育学研究, 42 (2). 25-34.
- 鯨岡峻 (1997) 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻 (1999) 関係発達論の構築. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻 (2013) なぜエピソード記述なのか「接面」の心理学のために. 東京大学出版会.
- Legerstee, M. (2005) INFANTS' SENSE OF PEOPLE Precursors to a Theory of Mind. the Syndicate of Press of the University of Cambridge. (M. レゲステイ著 大藪泰訳 (2014) 乳児の対人関係の発達—心の理論を導くもの. ミネルヴァ書房.)
- 町田奈緒士 (2022) トランスジェンダーを生きる 語り合いから描く体験の「質感」. ミネルヴァ書房.
- Malloch, S.N. (1999) Mother and infants and communicative musicality. *Musicae Scientiae* (Special Issue 1999-2000), 29-57.
- Malloch, S.N. & Trevarthen, C. (2009) Musicality: Communicating the vitality and interests of life. In Malloch, S.N. & Trevarthen, C. (Eds.), *Communicative Musicality: Exploring the Basic of Human Companionship*. New York: Oxford University Press. 1-11.
- 正高信男 (1993) 0歳児が言葉を獲得するとき 行動学からのアプローチ. 中公新書. 101-119.
- Mehr, S. A. & Krasnow, M. M. (2017) Parent-offspring conflict and evolution of infant-directed song. *Evolution and Human Behavior*, 38, 674-684.
- 持田京子 (2010) 1-2歳幼児のリズムおよび音楽的発達における共振の重要性. 大阪総合保育大学紀要, 14. 85-96.
- 諸富満希子 (2018) 他者との関わりによって促される1歳児の「しゃべる」「うたう」について. 日本女子体育大学紀要, 48. 171-178.
- 諸富祥彦 (2009) ジェンドリンの現象学. ジェンドリン哲学入門 フォーカシングの根底にあるもの. 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘 編著. 103-149.
- 本岡美保子 (2019a) 保育者の間主観的把握による情動調整場面のエピソード記述の分析—乳児はわらべうたをどう感じ、いかに喜ぶのか—. 教育研究ジャーナル, 24. 1-11.
- 本岡美保子 (2019b) 乳児保育における葛藤の意義—乳児と保育者の相互作用に着目して—. 保育学研究, 57 (3). 44-56.
- 本岡美保子 (2021) 子どもと保育者が「うたう」ようになる過程の構造：乳児保育における子どもの他者関係の構築に向けて. 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研

究, 2 . 559-568.

本岡美保子・七木田敦 (2018) 乳児の情動調整とわらべうたの関係性—他者関係の発達に課題があった乳児の経時的検討—. 幼年教育研究年報, 40. 73-82.

村上靖彦 (2016) 仙人と妄想デートする—看護の現象学と自由の哲学. 人文書院.

長野未来 (2021) 1歳児が遊びこむプロセスにおける見通し変容サイクル—二人称的アプローチで捉える情感の揺れ動き—. 国際幼児教育研究, 28. 155-172.

長崎イク (2006) 子どもの発達とわらべうた—心理学の立場からの検討. 常葉学園短期大学紀要, 37. 57-64.

中島文 (2011) 母親の歌いかけによる母子相互作用と情動調整. 生涯発達心理学研究, 3, 45-61.

中島文・田島信元・佐々木丈夫 (2010) 母親の歌いかけによる子どもの言語発達と情動発達との関係. 生涯発達心理学研究, 2, 65-75.

Nakata, T. & Trehub, S. E. (2004) *Infants' responsiveness to maternal speech and singing*. *Infant behavior Development*, 27(4), 455-464.

名和孝浩・田村佳世・鈴木裕子 (2015) 保育所における1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を身体表現として描き出す試み. 愛知教育大学研究報告. 教育科学編, 64, 11-19.

根ヶ山光一 (2010) 子別れとアロマザリング. ヒトの子育ての進化と文化—アロマザ・リングの役割を考える. (根ヶ山光一・柏木恵子 編著). 有斐閣, 55-70.

根ヶ山光一・柏木恵子 (2010) 人間の子育てを理解する窓としてのアロマザリング. ヒトの子育ての進化と文化—アロマザ・リングの役割を考える. 根ヶ山光一・柏木恵子 編著. 有斐閣, 1-7.

野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美 (2016) 乳児保育の質に関する研究の動向と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 56. 399-419.

小川博久 (2010) 遊び保育論. 萌文書林.

岡林典子 (2003) 生活の中の音楽的行為に関する一考察. —応答唱《かーわってー・いいよー》の成立過程の縦断的観察から. 保育学研究, 41 (2).

岡林典子 (2006) 「遊ばせうた」の習得過程に見られる音楽的行為の発達的变化: 話し言葉の発達との関わりを中心に. 表現文化研究, 6 (1). 1-13.

大方美香・玉置 哲淳・メアリー ミクマレン (2015) アメリカにおける乳児保育の現在と今後. 大阪総合保育大学紀要, 9. 301-316.

大谷尚 (2019) 質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで. 名古屋大学出版会.

Powers, N. & Treverthen, C. (2009) *Voices of shared emotion and meaning: Young infants and their mothers in Scotland and Japan*. *COMMICATIVE MUSICALITY*, 209-240.

Reddy, V. (2008) *How Infants Know Minds*. Harvard University Press. (V. レディー

- 佐伯胖 訳 (2015) 驚くべき乳幼児の心の世界－「二人称的アプローチ」から見えてくること. ミネルヴァ書房.)
- Robarts, J. (2009) Supporting the development of mindfulness and meaning: Clinical pathways in music therapy with a sexually abused child. COMMICATIVE MUSICALITY , 378-400.
- 坂上裕子(1999) 歩行開始期における情動制御：問題解決場面における対処行動の発達. 発達心理学研究, 10 (2) 99-109.
- 佐々本清恵・大方美香 (2016) 乳児保育における保育者との関係性 (Ⅱ)－乳児の「泣く行為」の内容分析－. 大阪総合保育大学紀要, 11. 191-204.
- 佐々本清恵・大方美香 (2017) 乳児保育における保育者との関係性 (Ⅲ)－保育記録を基にした乳児の「泣く行為」の月別内容分析－. 大阪総合保育大学紀要, 12. 197-212.
- 佐藤智恵 (2011) 自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析－「語られなかった」保育を枠組みとして－. 保育学研究, 49 (1), 40-50.
- Shenfied, T., Trehub, S. E., & Nakata, T. (2003) Maternal Singing Modulates Infant Arousal. Psychology of Music, 31, 365-375.
- 嶋田由美 (2016) わらべうた教育の歴史とこれから. 乳幼児の音楽表現 赤ちゃんから始まる音環境の創造 (保育士・幼稚園教諭養成課程). 日本赤ちゃん学会監修. 小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子編著. 中央法規.
- 白石昌子 (2006) 乳幼児の発達と音楽の関係－音楽の機能が及ぼす影響についての検討を通して－. 人間発達文化学類論集 3, 13-25.
- 白石昌子・齋藤美智子 (2021) 保育所におけるわらべうたの意義－S 保育園での実践を通して－. 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要 3, 19-28.
- 荘島幸子 (2008) <研究論文>1 事例研究再考：個を理解するということをめぐって. 教育方法の探究, 11. 17-24.
- Stern, D. N. (1985) The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books, Inc. (D. N. スターン 小此木啓吾・丸太俊彦・神庭靖子・神庭重信 訳 (1989) 乳児の対人関係 理論編. 岩崎学術出版社.)
- Stern, D. N. (2000) The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology; First Paperback Edition. New York: Basic Books
- 諏訪きぬ・金田利子・土方弘子 (1994) 3歳未満児の「保育の質」をとらえる指標. 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学, 36 (1) . 123-145.
- 得丸さと子 (2010) ステップ式質的研究法 TAE の理論と応用. 海鳴社.
- 得丸さと子・小林浩明 (2015) TAE リフレクション質的研究法 TAE .
<http://www.taejapan.org/> (最終閲覧 2023. 1. 2)
- 鳥光美緒子・北野幸子・山内紀幸・中坪史典・小山優子 (1999) 保育現実の分析のための方法的検討－津守真における転回をめぐって－. 幼年教育年報, 21. 1-8.

- Trehub, S. E., Ghazban, N. & Corbeil, N. (2015) Musical affect regulation in infancy, *Annals of the New York academy of sciences*. 186-192.
- Trevarthen, C. (1979) Communication and cooperation in early infancy. A description of primary intersubjectivity. In M. Bullowa . (ED.) , *Before Speech : The Beginning of Human Communication*. London:Cambridge University Press, 321-347.
- 土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ (2020) 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚:TAE ステップを用いた理論構築. *質的心理学研究*, 19. 46-67.
- 上田七生・山崎晃 (2003) 乳幼児の愛着形成に関する短期縦断的研究—保育者との関係が第一愛着対象者との関係に及ぼす影響— *保育学研究* 41 (2), 222-230.
- van Manen , M. (1997) *Researching Lived Experience 2/E*. The University of Western Ontario. (M. ヴァン マーネン 村井尚子訳 (2011) *生きられた経験の探求 人間科学がひらく感受性豊かな〈教育〉の世界*. ゆみる出版,)
- 和田幸子 (2008) わらべうたを用いた障害児保育実践—「遊びの構造分析」による事例の一考察—. *保育学研究*, 46 (2), 225-234.
- 鷺田清一 (2015) *聴くことの力—臨床哲学試論—*. ちくま学芸文庫.
- Williams, K. E., Barrett, M. S., Welch, G. F., Abad, V., & Broughton, M. (2015) Associations between early shared music activities in the home and later child outcomes: Findings from the Longitudinal Study of Australian Children. *Early Childhood Research Quarterly*, 31, 113-124.
- Wulff, V., Hepp, P., & Schaal, N. K. (2021) The influence of maternal singing on well-being, postpartum depression and bonding - a randomised, controlled trial, *BMC Pregnancy and Childbirth*, 1-15.
- 矢部朋子 (2011) 幼児の遊びに見られる音楽的表現の共有過程. *保育学研究*, 49 (2). 52-60.
- やまだようこ (2010) *ことばの前のことば—うたうコミュニケーション* やまだようこ著作集第1巻. 新曜社.
- やまだようこ (2020) *質的モデル生成法*. やまだようこ著作集第4巻. 新曜社.
- 山崎徳子 (2010) 「みんなの中の私」という意識はいかに育つか—自閉症のある中学生の自己意識の変容の事例から—. *保育学研究*, 48 (1). 23-35.
- 山竹伸二 (2015) 質的研究における現象学の可能性. *人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ*. (小林隆児・西研 編著) 新曜社. 61-117.
- 横山さやか (2001) 歌を伴う伝承遊びの実践に関する研究—幼児の表現の特徴を中心に— *日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科*, 7. 19-26.
- 横山さやか (2002) わらべうたに見られる幼児の表現の特徴—はないちもんめ・かごめかごめ— *日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科*, 8. 41-52.
- 湯澤美紀 (2020) わらべうたの臨床発達心理学的意味の再考. *臨床発達心理実践研究*, 15. 86-95.